

秋の伝道礼拝第3回 (10月26日)

一人の新しい人に

花巻教会 鈴木 道也牧師



詩編126編1-6節

エフェソの信徒への手紙2章14-22節

花巻教会牧師の鈴木道也です。

プロフィールにも記していますように、私は京都で生まれ、高校三年生まで大阪で育ちました。母がクリスチャンで、幼い頃から母に連れられて教会に通い、キリスト教が身近な環境で育ちました。父方の祖父は広島のパプテスト同盟の教会の牧師をしていました。

北海道の大学に進学し、4年生になろうとしていた2005年のイースターに洗礼を受けました。卒業してキリスト教出版社のお手伝いをしていた2008年、一人の友人が、「鈴木君は牧師になつたらいいと思う」と言ってくれました。言われた瞬間その言葉がストンと腑に落ちました。心の深い

所でずっと願い続けていたことを具体的に実現する道筋が、目の前に示されたように感じたのです。

教団立の東京神学大学に進学することになりましたが、入学に際し、私はある問題意識のようなものを抱いていました。東神大はカルヴァンと神学的に関わりが深い大学です。二十代の当時、私が全く理解できなかった—自分の信仰と最も距離があるように感じていたのがカルヴァンの神学でした。

16世紀のジュネーブで、三位一体の教理を否定したミカエル・セルヴェトウスという人が、火あぶりの刑に処せられたというのを二十代前半に知りました。火刑に処せられるに到る流れを間接的に作ったのがカルヴァンでした。人文主義学者のセバスチャン・カステリヨはこのことを批判する文書『異端は迫害さるべきか』を出版しました。私が共感を覚えたのは、信教の自由と宗教的寛容を求めたカステリヨの考え方でした。反対に全く理解できなかったのが、カルヴァンの考え方でした。どれほど三位一体の教理がキリスト教に

おいて重要であつたとしても、その教理を否定する人の命を奪うことまで容認する、カルヴァンたちの「厳しさ」とは一体何なのだろう、と思いました。そのような問題意識を持った上で、私はあえてカルヴァンと関係が深い東京神学大学に入学することにしました。

2013年4月に花巻教会に着任しました。牧師として働く中で段々と、神学校で語られていた言葉に何が足りなかったのかに気づかされてゆきました。それは、「人間の尊厳」についての言葉でした。神学生の頃、自分自身の聖書の読み方や説教で語る言葉に、何かが足りていないと思いながら、ずっとうまく言葉に出来なかったものは、人間の尊厳についての視点であつたことに思い至りました。そうして、今のキリスト教会に求められているのは、人間の尊厳についての感受を取り戻してゆくことなのではないかと考えるようになりました。また同時に、神学校での学びを客観的に受け止め直すことができるようになりました。入学当初から疑問であつたカルヴァンの厳しさの根底にあるものは何であつたのかも、自分なりに理解できるようになりました。

2009年、学部3年生に編入学し、4年間の学びの中で、東京神学大学の教え、その神学を自分の血肉とし、自分の体に刻み込み、自分の体の一部としました。と同時に、それとは別に、「何かが足りない」という想いがありました。その違和感は2011年3月に起こった東日本大震災と原発事故を受け、大きなものとなっていったように思います。震災や事故のニュースが日々報道される中、大学のチャペルで語られる先生方や学生たちの言葉に、又自分自身が語る言葉に、「何かが違う」「何かが足りていない」と痛切に感じる

カルヴァンの厳しさは、「徹底して神に栄光を帰そうとする」とことから来る厳しさでした。心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして

主なる神を愛そうとするがゆえです。その厳しさを堅持することで、プロテスタントの改革運動が推し進められ、多くのプロテスタント諸教派が生れ出ることができました。徹底して神に栄光を帰そうとするその姿勢が、「生れ出ようとするもの（＝プロテスタントの諸教派）を守るための厳しさ」につながったのだと私は受け止めています。それらの多大なる功績を受け止めつつ、同時にカルヴァンたちが犯した罪責も私たちははつきりと受け止める必要があります。自分と異なる信仰理解をもつ相手を、「異端」とみなし、敵対し合い、時には相手の生命と尊厳を奪った過ちです。その不寛容で非人間的な姿勢については、決して正当化することはできません。

徹底して神への愛に生きようとした宗教改革者カルヴァンたち。その神への愛は、確かに信実なるものでした。一方で、神への愛を徹底するあまりに隣人への愛が背後に退いてしまっていたのではないかと思います。聖書の教えにおいて本来、神への愛と

隣人への愛は切り離すことはできず、順列も付けることができないものです。しかし宗教改革者たちの間で「ただ神に栄光あれ！」と神に栄光を帰することを重視するあまり、人間の尊厳への感受が希薄になってしまっていたのです。

その課題はいまも私たちプロテスタント教会に強く影響を及ぼし続けているように思います。私の母校の神学校も、神に栄光を帰する伝統を重視するあまり、人間の尊厳についての感受や社会と関わることへの意識が希薄になっている部分はあるかもしれません。日本キリスト教団全体も、礼拝を重んじ神に栄光を帰することを重視するか、あるいはむしろ、社会とのかかわりや連帯を重視するかに立場が二分化されてしまい、その相違が教団内に分断と対立を生み出すことに繋がっているように思います。

等しいことです。そのような者となるために、私は東神大に入学したのだという実感がございます。

本日の聖書箇所エフエソの信徒への手紙2章14～22節で、イエス・キリストがご自身の体において《敵意》という隔ての壁を取り壊してくださったこと、ご自分の十字架を通して、対立する二つのものを一つの体として和解させてくださったことが語られています。

本日お話ししたこととつながりますと、神に栄光を帰することを重視する立場も、人間に尊厳を確保することを重視する立場も、同じ一つのキリストの体に結ばれているのだと受け止めることができます。同じ一つの体に結ばれ、それぞれがかけがえのない役割を果たしながら、互いに補い合っている。そのような協働することで、より豊かな働きをすることができると私は信じています。自分たちがキリストの体の「一部分」であることを忘れ、「全体」であると誤って認識していたところに宗教改革者たちの過ちと限界があるように思います。

います。

イエス・キリストの体においては、一切の敵意はありません。あるのは愛です。一人ひとりの存在をかけがえのないものとして、ご自分の体に刻み付けようとする神の愛です。イエス・キリストはこの神の愛を、身をもって現わしてくださいました。ご自分の生き方を通して、十字架にかけられたご自分の体を通して、敵意という隔ての壁を取り壊し、まことの平和を実現してくださいました。

15節ではイエス・キリストを《新しい人》と呼んでいます。この一人の《新しい人》の体には、私たち一人ひとりの存在が刻み込まれています。わたしの存在も、あなたの存在も。すべての人が、神の目に価高く貴い存在として刻みつけられています。決して失われはならない、大切な、かけがえのない存在として！

この《新しい人》なるイエス・キリストの体に、ご一緒に私たちの心を向けたいと思います。

（出席33名。文責・編集委員会。要約担当・島野三千代）